

のであるから、その制約を解き放って、初期条件の如何に拘らず行列の級数(1)が収斂する条件を求める必要がある。残されたこれらの問題は、その後例えばソローに依って部門間の結合(coupling)との関連を考慮しつつ解決が與えられていること(*Econometrica*, January 1952)は周知の事実であろう。しかしグッドウィンとの論争を通して明かとなる重要な一點は、マクロ體系の内部構造の變化から經濟變動の可能性を論證しようとするグッドウィンの意圖に對し、チップマンの意圖が明瞭でないという點である。チップマンは残された問題として加速度原理を擧げ、乗數理論と加速度原理を結合した模型を導入しているが、それが採用せらるべき明確な規定を缺いている。凡そかかる事實はまたチップマンの意圖について讀者を充分説得せしめないことを示すものであろう。總じて多部門乗數の分析が、不當に部門間の内部構造との関連についての考察を輕視しているとみるのは評者の思い過しであろうか。

IV

以上ほぼチップマンの著作の主要な論點について概観した。評者の主観により、また野心的な題目と氣鋭な著者の力量に期待するの餘り徒に「望蜀」の評を重ねたのではないかを懼れる。それ故本書に関する若干の書評の要點を摘記して讀者の參考に供したいと思う。

「本書は行列乗數に関する著作である。……チップマン博士は、行列演算を驅使しうる全ての經濟學者にとっては必讀のすぐれた著作を著したのである¹⁾」

「われわれが過度の集計のためにか、或は重要な變數を逸することのために不満な豫測を行うか、それともこれ以上の彫琢に對して多くを期待しないかのいずれかを確定することは、現在是不可能である。しかし變數を追加してチップマンの方法を擴充することは、その模型を改變する方向を示唆しているのであろう²⁾。」

(後記) ここで簡単にチップマンの閱歷にふれておく。チップマンは Johns Hopkins 大學で學位(Ph. D.)を得、1950—51年には Cowles Commission の客員、1951年以後 Harvard 大學の助教授となって今日に及んでいる。ここに紹介した書物はチップマンの最初の著作である。

(倉林義正)

1) R. Turvey, Book Review, *Economic Journal*, September 1952.

2) O. H. Brownlee, Book Review, *Econometrica*, July 1952.

И. В. Сталин

『ソ連邦における 社會主義の經濟的諸問題』

И. В. Сталин: Экономические Проблемы
Социализма в СССР. Госполитиздат, 1952.
95 стр.

はじめ『ボルシェヴィク』誌に掲載され、後に單行本として刊行された本書は、スターリンのこれまでの理論的勞作の中でも、おそらく内外から最も活潑な反響をうけたもののひとつであろう。第二次世界大戦とその後の政治・經濟的諸事件によって、いわゆる「二つの體制」のいずれの側においても、そしてまた兩者の間の關係においても、幾多の新しい情況が生れ、この新しい情況の分析に基本的な特徴づけを與えるような勞作があらわれることはすでに久しい以前から待望されていた。したがって、まさにこのような要望に答えるものとしてあらわれた本書が廣汎な層の人々の注目をあつめたのは意外なことではない。本書は現代資本主義と社會主義が當面している多くの主要な政治經濟的諸問題を取りあつかっており、その中には從來ソヴェト内外の經濟學者の間で公然たるボレミックの對象となっていた問題——たとえば社會主義のもとでの商品生産と價值法則の問題——や多くの經濟學者が必ずしも明快な回答を用意していなかった問題——たとえば資本主義と社會主義の基本的經濟法則の規定や社會主義から共產主義への移行の條件の問題など——が含まれている。著者はこれらの問題にたいして、きわめて簡潔にはあるが、基本的には異論の餘地のないようなきっぱりとした解決を與えた。少くともマルクス主義的經濟學に關心をもつ人々についていうかぎり、この100ページにみたない小冊子の刊行はレーニン『帝國主義論』以來の最も刺戟的な事件となったようにおもわれる。

社會主義の經濟理論に関する問題だけにかぎっても、本書で取扱われている問題は商品生産と價值法則の問題、共產主義への移行の條件の問題、社會主義の基本的經濟法則の問題、および社會主義のもとでの經濟法則の性格の問題や經濟學の對象の問題など、甚だ多岐にわたっている。その中でも理論的にみて特に興味深いのは、從來明確な解決を與えられていなかった二つの問題——社會主義のもとでの商品生産と價值法則の問題および社會主義から共產主義への移行にともなうコルホーズ的所有形態の止揚の問題——の研究が掘りさげられ、相互に連關づけられていることである。

すなわち、從來の價值法則論争においては、資本主義

的價值法則がそのまま社會主義にもあてはまるかのよう
に主張した人や、或いはその逆に價值法則の作用を全く
みとめない人もなかったわけではないが、大たいにおい
て従来は一面では價值法則の作用を認めながらも同時に
資本主義の場合との差異を強調する、いわゆる「變容さ
れた價值法則」の理論が支配的であった。しかし、この
場合「變容された價值法則」という名のもとにいったい
いかなる内容を意味するかは必ずしも各人一様でなくそ
こから多くの論争が生れたようである。著者は「變容さ
れた價值法則」という不明確な言葉の背後にかくされて
いたものに明確な特徴づけを與え、ソヴェト連邦におけ
る特殊な商品生産の發生の必然性とその現在の役割と將
來におけるその消滅の必然性とを系統的に解明してい
る。

一方、コルホーズ制度の止揚の問題については、従来
も社會主義から共產主義への移行の條件として生産力の
増大や文化面での向上とならんで、コルホーズ的所有の
止揚（つまりそれを全國民的所有の水準にまで高めるこ
と）が必要なことは、しばしば指摘されていた。だが、
社會主義から共產主義への移行を達成するにはコルホー
ズを現在のままにしておくことはできないということに
は異論の餘地がなかったとしても、積極的にいかなる方
策をとるかという点では必ずしも明確でなく、アルテリ
からコムミューンへの歩みとかコルホーズのソフォーズ
化とか MTC の役割の強化だとか、更にはコルホーズ
都市の建設、副業經營（コルホーズの工業經營）の増設
など、多様な見解が斷片的にのべられていたにすぎない。
それは結局、コルホーズ的所有とかコルホーズ的生产形
態というものの實體が明確にされていなかったためであ
ろう。

著者は、ソヴェト社會主義經濟のもとにおける商品生
産と價值法則の問題が、實は本質的にはコルホーズ的生
産形態の問題であることを明かにすると同時に、他方で
は、コルホーズ制度の止揚の問題が實はコルホーズ生産
物を商品流通の制度から直接的生産物交換の制度に移行
させる問題であることを指摘して、この二つの問題があ
る意味ではひとつの問題であることを明かにした。これ
によって、従来やゝもすると、スコラ的・抽象的な問題
として論議される傾向のあった、社會主義のもとでの商
品生産と價值法則の問題や共產主義への移行の條件の問
題が、きわめて實際的・具體的な問題として發展させら
れたようにおもわれる。

だが、以上の點について著者の與えた回答はきわめて
簡潔な明確なものであるがソヴェト經濟の實情にくらい
外國の研究者の場合には、必ずしも本書によってすべて

の疑問が氷解するわけではなく、むしろ逆に多くの疑問
が刺戟される。たとえば、價值法則のかぎられた適用の
一つの例として、社會主義企業の収益性（*рентабельно-*
сть）の問題があげられている。すなわち社會主義のもと
では、個々の企業の収益性は資本主義の場合のように規
制的な指標としての意義をもたず、むしろ全國民經濟的
な見地から必要とあれば、常に neglect されることが指
摘されている。事實、過去 30 年にわたるソヴェト經濟
の急テンポな發展の鍵の一つがこゝにあったことは明か
である。だが、このように個々の企業の *рентабельность*
を無視することにも一定の限界があろうとおもわれるし、
また全國民經濟的な収益性という場合にも何らかの經濟
的な規準がなければならないであろう。このような問題
は、もちろんいわゆるホズラスチョート制度や國民經濟
計畫の内容に立入ることなしには解決されない問題であ
るが、いずれにせよこのような問題の解明は同時にまた
資本主義の場合に私的企業の制度がいかに全國民經濟的
な合理性を阻害しているかという問題に光を投ずるにち
がいない。

また、コルホーズの止揚の問題についていうと、著者
はコルホーズ生産物の商品化が現在すでに生産力の發展
にたいする障害となりつつあり、共產主義への移行を達
成するためには、コルホーズ生産物を商品流通の制度か
ら漸次的に生産物交換（*продуктообмен*）の制度に移行
させる必要があることを指摘し、かかる移行の萌芽とし
て現行の *отоваривание* の制度を利用することを提案
している。かつては都市と農村の商品交換（*товарооб-*
мен）の體系を發展させることが要求されたとすれば、
いまやその克服が要請されているのであり、かつてはコ
ルホーズの建設が急務であったとすれば、いまはその止
揚が問題とされる。僅々 20 数年間の變化としてはまこ
とにめざましいものというべきであろう。だが、この場
合、スターリンがコルホーズ的所有の止揚の鍵として提
出した *отоваривание* とはいったいどんな内容をもっ
ているのか、それはたとえば 1930 年代の初期に豫約買付
制（*контрактация*）と結びつけて盛んにおこなわれた
отоваривание とどんな相違があるのか、コルホーズ生
産物の餘剰（*излишек*）を商品流通の體系から生産物交
換の體系にうつすという場合のこの「餘剰」とは具體的
にはどの範圍のものをさすのか、そしてまたコルホーズ
生産物の商品化が生産力の發展にたいする障害になるとい
うのはどのような事態をさしているのか、そして生産物
交換の制度にかえればどのようにしてこの障害が除去さ
れるのが、等々の疑問が生じる。だが農産物の流通機構
に関しては、従来われわれはきわめて限られた情報しか

與えられていないのである。(たとえば、『ヴァプロスイ・エコノミキ』のような雑誌やゴスプランの公式発表は主として農業の生産・技術面の問題を取扱っていた。)

社會主義のもとでの經濟法則の性格の問題、つまり社會主義社會の經濟法則もまた人間の意志で勝手に改變することのできない客観的な性格のものであるという主張は、本書の中でくりかえし力説されている。わが國では、ここで批判されているような「主観主義」的見解がこれまでに公然と表明されたことはないようであるが、ソヴェトの經濟學者の間にはこの見解の支持者がかなりあったようである。たとえば、レオンチエフ、グラトコフ、コズロフ、ソローキン、クルスキー、等のわが國にも知られていた多くの經濟學者が、このような主観主義的見解の支持者として批判されている。もちろんこのような主観主義の批判は決して客観的法則の盲目的貫徹を主張する「客観主義」に門戸が開かれたことを意味しない。スースロフが『プラウダ』(1952, 12, 24)紙上でヴォズネSENSキーの誤謬を特徴づけて、「ソヴェト社會における計畫と國家の役割についての主意主義的見解 (волюнтаристские взгляды) と價值法則をあたかもソ同盟國民經濟諸部門間への労働の配分の規制者であるかのようにみなす價值法則のフェティシズム化との混合」と規定したことはきわめて教訓的である。

したがって、社會主義の經濟法則の客観性を承認するだけで、すべての問題が片づいてしまうわけではない。人間の意志と無関係に行われる法則であってしかも人間がこれに従屬的に支配されるのではなくて逆にこれを認識して社會のために利用することのできるような法則、という概念はかなり複雑な論理構造をもっている。このような型の法則は形式的にみて従來の資本主義の經濟學が取扱っていた法則とはかなり異っている。資本主義の經濟法則が常に基本的にはやはり invisible hand として觀念され、その經濟政策の最後の言葉がレッセ・フェールであったとすれば、社會主義の經濟法則はいわば visible hand であって、社會はこの法則を認識して利用することができるし、また利用しなければならないので

ある。

だが、いずれにせよスターリンは社會主義のもとにおける經濟法則の客観性を主張することによって、科學としての「社會主義經濟學」の基礎づけをあたえたといえることができるであらう。すなわち、國家が經濟法則の創造者とみなされているかぎり、科學としての經濟學が存立する餘地は殆んどないからである。われわれは「スターリン論文」による主観主義の克服を契機として、今後ソヴェト經濟學界の理論的思惟が活潑化することを期待できるであらう。1952年の『ヴァプロスイ・エコノミキ』誌や『ヴェストニク・スタティスティキ』誌において、社會主義經濟學の對象と分野であるとか統計學の對象と方法などという、きわめて基本的な問題について一連の論争論文が掲載されたのは、おそらくこのような傾向の反映であったとおもわれる。雑誌『コムニスト』の1952年の最終号には、「ソヴェト經濟科學の重要課題」という卷頭論文が掲載されているが、そこでは具體的な經濟問題だけに注意を集中して、理論的な問題を等閑視する舊來の傾向が強く批判されており、單なる事實の蒐集、記述の段階をこえて、理論的一般化に進むことが要請されている。經濟法則の客観性についてのスターリンの主張は、ソヴェト經濟學がこのような方向へ前進するにあつての大きな障害をとりのぞいたものといえるであらう。ソヴェト連邦における社會主義建設がすでに30數年の經驗をつみ、社會主義から共產主義への移行という新しい大きな實踐的課題に直面している現在、社會主義經濟の經濟的諸法則を系統的に研究することは大いに必要にもなり、また可能にもなったものとおもわれる。スターリンの勞作『ソ連邦における社會主義の經濟的諸問題』は、社會主義のもとでの經濟法則の性格、社會主義の基本的經濟法則、社會主義のもとでの商品生産と價值法則、社會主義から共產主義への移行の諸條件、等の諸問題に基本的な解決をあたえることによつて、ソヴェト經濟學の今後の課題である社會主義經濟學の建設に大きな寄與をしたものといえる。

(岡 稔)